

## ちょっとした油断から…

50歳 男性

それは突然の出来事だった…

4月初めの土曜日、その日は夕方からの会議があり、その会議の後に懇親会があった。楽しく酒を飲み、1次会、2次会、3次会と会場を変え、帰路についたのは、夜中の3時過ぎであった。

タクシーもなく相当量のお酒を飲んでいてもかかわらず、「これ位飲んでも大丈夫」という根拠もない自信のもと、街灯があまりない、歩道もない国道を歩いて自宅を目指していた。

そこで事故に遭った。

何が起こったのか分からない。

「大丈夫ですか？」という声は聞こえるが、誰だか分からない。

頭から血を流しながら側溝に座り込んでいる自分がいた。

救急車に乗せられ病院へ。その後のことは全く何も覚えていない。

翌朝、目が覚めると顔が痛い。顔に2箇所もの裂傷があり縫合したとのこと。あとは打撲程度の状況で、命に別状はなく、骨折もなく、これ位の怪我で済んだのが奇跡である。

それから顔の傷が癒えるまでの1週間あまり、いろいろな思い（後悔・自戒の念等）が頭をよぎっていった。

「早く帰っていれば…」 「歩いて帰らなければ…」 「タクシーに乗って帰れば…」 事故に遭わなかったかも知れないという後悔が。

また、もし打ち所が悪ければ、怪我がひどかったら、「死んでいたかも知れない。」「重傷だったかも知れない。」「寝たきりの生活になったかも知れない。」「そんなことになれば…。

家族のことを考えると、ゾッとした。

私も車を運転する一人である。

誰もがそうであるように、交通事故防止に努めて、日々、車を運転している。

今回、加害者である青年も、同乗者の青年もそうであろうと思う。

私の怪我が最小限で済んだのは、事故後、二人が早急な対応を行ってくれたおかげである。

もし、これが悪質なドライバーであれば、もっとスピードを出した状況で事故に遭っていたかも知れないし、ひき逃げのまま放置されていたかも知れない。

車社会の現在、車なしの生活は考えられない状況にある。

だからこそ、車を運転する者はもちろんのこと、歩行者も、車社会の中で、日々、生活していることを認識し、ともに交通事故防止に努める意識を高めていかなければならない。

「歩行者がいれば車がよけてくれる。」「運転手は必ず歩行者に気付いてくれる。」等の考えは甘い。

歩行者が交通ルールをしっかり守り、時間、天気に応じた見えやすい服装等をしない限りは難しいと思う。

今回、歩行者として事故に遭い、その気持ちが特に強くなった。

交通事故に遭い苦しむのは、加害者、被害者だけでなく、その家族であり、周りの人達である。

交通事故のない、交通事故を起こさない社会を願い、これからも車と上手く付き合いながら、交通安全に努めていきたいと思う。

もう事故はいいです。

